

経済格差、地域格差のなかの「遊べない子ども」と 「遊べなかった子ども」 ——研究活動報告その3——

龍谷大学短期大学部・教授 里山学研究センター・研究員
中根 真

はじめに

2021年度の研究活動報告「自然と子どもの出会い方は十人十色」では、里山学において子どもを議論する場合、子ども・子育ての多様性に加え、その〈いま〉と〈むかし〉を視野に入れる必要があることを述べた。なぜなら、子どもは遊び体験の経済格差と居住地域の格差のなかを、より具体的には生まれた家庭・地域による格差のなかを生きているからである（中根2022：46-47）。

以下、経済格差、居住地域格差のなかの「遊べない子ども」の増加について述べる(1)。次に、大阪市立北市民館保育協同組合に関する福元真由美の研究に依拠しながら、かつ当時撮影された写真や図をまじえて、露天保育や郊外保育を紹介する(2)。最後に、3年間の研究活動を総括し、現時点における研究のまとめを述べている(3)。

1 経済格差、居住地域格差のなかの「遊べない子ども」の増加：〈いま〉を見つめる

武田信子は「遊べない子どもが増えている」と警鐘を鳴らしている。ただし、ここでの「遊べない」理由や背景は多様である。

まず、「遊び体験でも経済格差が進む」（武田2021：130）と述べ、「恵まれた場所に行ける子どもと行けない子どもの遊び格差、体験格差は広がるばかり」（武田2021：131）と指摘している。森のようちえんに関する次の指摘は一考に値する重要なものである。すなわち、「現在、『森のようちえん』（1日のほとんどを野外の自然の中で過ごす幼児教育を行う団体で、現在全国に250以上ある）が行っているような、自然保育を進めよう、子どもたちを戸外で育てようという活動、園庭や校庭を自由で自然豊かな遊び場に変えようという活動が盛んになっています。しかし、そういう場でさえも、大人の関与によって大人の意図が先行した場になってしまうことがしばしばあります。『子どもたちには自由で楽しい遊びが必要』だから、『（大人が先頭に立って）子どもを楽しく遊ばせよう』『（遊びを知らない子どもたちに）遊びを教えよう』『（遊べていないから）主体的に遊びなさい』というわけです。大人が子どもに『やらせる』モードになっている時点で子ども中心ではないのですが、子どもにいいことをさせたいという善意の大人はこの矛盾に気がつきません。今の時代に遊べる養育環境を作ることは、大人が関与しつつ関与しないという絶妙なバランスが求められ、難しいのです」（武田2021：133-

134) と。安全配慮の観点からは大人主導が必要であるが、「大人が関与しつつ関与しないという絶妙なバランス」が崩れやすいことを暗に指摘している。

以上の点は、森の幼稚園/ようちえんに関する先行研究の多くが不問に付してきたか、あるいは捨象してきた重要な論点の1つであると考えられる。里山学において子どもの参加や関与を議論する際にも「大人が関与しつつ関与しないという絶妙なバランス」を絶えず意識し続けることが必要不可欠であろう。

他方、遊び体験の地域格差が大きい実態も指摘されている。すなわち、「地方の子どもたちには地域があるのでしょうか。実は地方の子どもたちの移動手段は自家用車で地方の子どもたちのほうが地域を歩く機会が少なくなっています。ここで興味深い実践研究をご紹介します。青森県の自然豊かな地域の小学校で、車通学の子どもたちが「キレル」傾向に気づいた先生が徒歩通学を推進したところ、子どもたちの体温が上昇し、落ち着き、学力が上がり、基本的な生活技能を獲得していなかった子どもたちも獲得できるようになったという（小鹿和男「歩かない子どもは退化する」『子どものからだと心白書2019』、ブックハウス・エイチディ）」（武田2021:139）。

この点について筆者自身もいくつかの経験が思い出される。第1に自らの子育て経験であるが、毎年4～5月になると大阪市郊外の富田林市や河南町を訪ね、カエルを捕獲した体験である（実のところはカエルの卵やオタマジャクシを見せたかったのだが、タイミングが合わず一度も実現しなかった）。わが子3人がカエルの捕獲に夢中になるなか、公園で出会っ



写真1 水槽に捕獲したカエル（筆者撮影）

た地元の小学生たちは水槽に捕獲したカエル（写真1）を気持ち悪がって触ろうとはしない。加えて、「そんなにカエルが好きなん？わざわざ大阪市内からここまで採りに来るなんて？」と尋ねられる珍妙な会話シーンに遭遇した。

第2に数年前になるが、実習巡回で訪問した奈良県内のある市立こども園は山の高台にある立地条件から車での送迎が常とのことであった。徒歩や自転車による登降園は時間的にも容易ではなく、豊かな大自然に囲まれているにもかかわらず、登降園や保育中の散歩は乏しく、自然との接触はかえって少ないとの話を園長から伺った。車なしでは生活できない地域生活の現実、子どもと自然との日常的な出会い方を規定している一例であり、それは自然環境の有無や多寡とイコールではないことを如実に教えている。以上のように、自然環境が豊かであることと、当該地域に暮らす子どもが自然と豊かな関わりをもつこととは直結しておらず、注意が必要である。

2 大阪市立北市民館保育協同組合に関する福元真由美の研究：〈むかし〉を見つめる

次に、自然と子どもの関係をめぐる〈むかし〉に目を転じよう。保育の歴史において大阪市立北市民館保育組合をどのように位置づけるかという作業は十分になされてこなかったと述べ

る福元は、3つの点から注目している。すなわち、①北市民館保育組合が内務省の社会政策や職場における保育所とは異なり、セツルメントと協同組合を基盤にアソシエーションを形成した点である。②都市で子どもの養育を私事化した家族の問題を主題とし、母親の相互的結合の可能性を追求した点である。③「郊外保育」が保育における新しい自然への関心と意味を生じさせると同時に、親の協同性の構築と深く関わっていた点である（福元2019：60）。

ところで、北市民館周辺のスラムは、幼い子どもにとって生命の危機にもさらされる過酷な環境であった（写真2～4参照）。志賀志那人は「子供の国」（1925年）で記している（福元2019：61）。「遊び所もなく、邪魔者扱いにされ、四十数万本の煙突から噴き出される煤煙の量幾千貫と謂う恐ろしい産業の地獄、地腥い生存の戦、音響と振動の襲来、草は黒く、土は油じんだこの街に彼らは泥鼠のようにかけ廻っている」（志賀1925：7）。市民館事業の一つの柱に児童保護がおかれたのも、「少くとも十万は下らない」幼児の「遺棄状態」のすさまじさ、かつ極めて高い乳児死亡率に、志賀が強い問題意識を抱いたからである。また、スラムでは夫婦の婚姻関係が一時的な場合も多く、「私生児、庶子」の世話が放棄される状況は深刻であり、「児童の環境として不良住宅が身体上甚だ好ましからざる事」だけでなく、「殆ど暴露されたる性欲生活と、賭博」によって、子どもの精神面にもよくないことを危惧していた（福元2019：61-62）。



写真2 大正10年附近の状況

出所）北市民館記念誌編集委員会（1983）『61年を顧みて—大阪市立北市民館—』大阪市民生局（北市民館）、p.20より転載。



写真3 都島橋上流の淀川 小舟に定住する多数の家族

出所）川端直正（1951）『北市民館30年のあゆみ』大阪市立北市民館運営委員会、p.8より転載。



写真4 忘れられた街の子供達

出所）川端直正（1951）『北市民館30年のあゆみ』大阪市立北市民館運営委員会、p.7より転載。



写真5 露天保育所

出所）北市民館記念誌編集委員会（1983）『61年を顧みて—大阪市立北市民館—』大阪市民生局（北市民館）、p.37より転載。

こうした子育ての劣悪な環境を直視した志賀はその改善や是正のための取り組みに着手

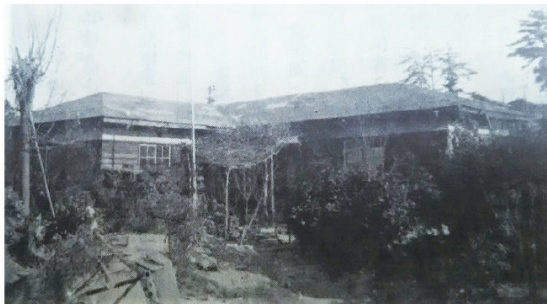


写真6 煤煙を逃れて建てられた豊津の郊外園舎
(1926年9月完成)

出所) 北市民館記念誌編集委員会 (1983) 『61年を顧みて
—大田市立北市民館—』 大阪市民生局 (北市民館)、
p.38より転載。



写真7 幼児保育

出所) 北市民館記念誌編集委員会 (1983) 『61年を顧みて
—大田市立北市民館—』 大阪市民生局 (北市民館)、
p.39より転載。

し、試行錯誤を重ねていった。第1に、露天保育所である (写真5参照)。この着想は橋詰せみ郎の影響を受けたものである。1925 (大正14) 年3月、志賀は木賃宿主の小野資彌が提供してくれた空き地に、淀川善隣館のS・F・モランから贈られたテントを張って露天保育所を開始した。対象は3歳児から学齢児まで、定員40名で保育時間は午前8時から午後5時、保育内容は遊戯・唱歌・談話・工作など幼稚園の保育内容を模したものであった。子守学校の託児の延長であり、北市民館の中にも貧しい家庭の子どもを対象とした保育所が設置され、無料で乳幼児を預かった。さらに詳細な時期は不明だが、「近所隣の母親が共同して交替で子もりする」ことも計画されているが、この試みは「母親たちの教養や訓練が無かった」ために、早々に「失敗」してしまう (福元2019: 62)。

第2に郊外保育、自然中心の保育である (写真6~7、図1¹参照)。志賀は橋詰の家なき幼稚園の実践から着想をえて、周囲の寺院、神社、公園を保育活動の場にするを思いついた。なかでも最もよく利用したのは長柄にある鶴満寺だったようである。試行錯誤しながら、「最後にはやはり如何なる建物

や設備よりも青空の下が一番よい」という考えにいたったという (福元2019: 72)。志賀も橋詰と同様に、自然と子どもの調和的な関係を思い描いて自然中心の保育を構想した。「凝視する小さな眼—子供の国 (六) 保育事項の—」(1927年) で、志賀は「子供はおとなよりも強い融合性を自然に対して持って」おり、「自然に対する知覚」が「鋭い」という。このような自然と子どもの結びつきは、雄大な阿蘇山を眺めて育ったという志賀自身の「故郷の観念」から捉えられていた。さらに「豊かな心の生活を築く第一歩は自然に親しむ事にある」と考えていた。子どもは自然の中で情緒を安定させ、生き物に親しんで自らの「観察」「理解」により



図1 くすのき画「口絵 千里山に於ける北市民館保育組合郊外幼稚園」

出所) 『子供の世紀』第5巻第8号、
1927年8月より転載。

1 志賀が郊外保育を展開した当時の千里地域について、そのビジュアルな理解には「写真でひもとく街のなりたち 大阪府千里」が大変有益である。最終閲覧日2023年1月15日現在、<https://smtrc.jp/town-archives/city/senri/index.html>

「愛」することを学んでいくという。また、幼児は生き物の「観察」や自然を眺めることを通して、対象についての認識や観念を形成していくと考えられた。こうしたことから志賀は「保育場としての自然」「保育上の理想として自然」を強調した（福元2019：72-73）。

3 「幼児教育の貧困化」防止・脱却の経験に注目する：現在と過去を往還しながら問い続ける

以上、本稿は〈いま〉と〈むかし〉の双方に目配りしながら、2022年度の研究の進展について報告してきた。2020年度以降、本研究プロジェクトに参加したことは、結果的に自然と子どもとの関係を意識化する好機となった。とりわけ、2019～2022年度に採択された科研費課題「『幼児教育の貧困化』防止・脱却と就学前後の連続的な貧困予防に関する地域比較研究」との関連では、幼児の自然との関わりや自然遊びの体験について、現在と過去を往還しながら問い続けることにつながった。たとえ時代や社会が異なっても、経済格差、居住地域の格差のなか、幼少期から自然と豊かにふれあって「遊べない子ども」も、「遊べなかった子ども」も存在することが確認できたと考えている。以下、大阪市立北市民館保育組合による郊外保育に焦点化し、その意義や意味を考察しておきたい²。

まず、志賀志那人は、橋詰せみ郎の家なき幼稚園の実践を、下層社会に生きる子どもたちにも実践しようとした。志賀のオリジナルな発想は「自然のなかでの生活体験を通した保育」が社会集団としての友達との結合、保母との関わり、親の組織や協同作業を通しての社会的適応の訓練につながるという考え方であり、子どもの自然観察、飼育、栽培、土との接触などの意義を説いた。それは志賀自身の育ちの影響、つまり、熊本・阿蘇の雄大な自然の中で育っていたことを背景に、大都市の大気汚染など劣悪な環境のなかでネグレクトされていた子どもたちを見るに見かねて自然の中へというロジックが生まれたのではないかと考えられる。その前提は、子どもにとっての自然の価値や意味は大人のそれとは異質であるという点である。

したがって、乳幼児の貧困のうち、遊びの貧困、なかでも自然遊びの体験不足、社会的剥奪を問題として、先駆的に取り組んだパイオニアの一人が志賀だったのではないかと仮説的に考えている。志賀が考える幼児教育は、遊び場のない親の仕事場附近で邪魔者扱いされ、都市の産業地獄＝公害のなかにある子ども達、さらには不良住宅がもたらす子ども達への悪影響の緩和に向けられたものである。1日でもよい、町の外へ、太陽の輝く青草の上や水のほとりに連れ出すこと、園舎のなかの保育ではなく、あくまでも青空と土のある露天保育、さらには郊外保育が目ざされた。

とはいえ、子ども達をより良い環境に連れ出すという発想そのものは志賀が最初ではない。明治末期、野口幽香らの二葉幼稚園（後の二葉保育園）の関連史料にはすでに同様の発想が見出せる。「私立二葉幼稚園設立趣意書」（1900年）によれば、下層社会に暮らす幼児の境遇には誘惑と悪い実例が豊富であるため、次第にその不幸が増し、それによって将来罪惡に陥り、社会の進歩と国家の秩序を害することになる。そのため、これらの幼児を未だ悪しき感化が浸潤していない時期から、より良い境遇のなかで教育し、良き国民に育成することが重要であると述べている。また、保育事業は保育を受ける子どもと両親の幸福だけでなく、社会一般を向上

2 関連して、大阪歴史博物館学芸員・飯田直樹氏は、橋詰せみ郎の家なき幼稚園、志賀志那人の大阪市立北市民館保育組合の活動を含む解説動画を公開されている。『【OSAKA MUSEUMS学芸員 TALK&THINK】大阪の福祉と小学校』最終閲覧日2023年1月29日現在、<https://www.youtube.com/watch?v=z1MQ80wVldY&t=6s>

させ、犯罪を未然に予防するため、養育院や感化院、出獄人保護等の慈善事業よりも根元的である。まさに「予防の1オンスは治療の1ポンドに優る」という諺のとおり、社会改良上いっそう有効であるという考え方を明確に示している。現代的に言えば、非行や犯罪に至るには幼児期における劣悪な境遇の影響があり、その影響を多少なりとも緩和するため、良い境遇、つまり幼児にとって安心・安全かつ適切な時間と空間、そして教育が必要であると主張している（二葉保育園編1985：5-6）。

また、「私立二葉幼稚園拡張主意書」（1913年）は、幼少期の子どもの救済こそ根本的かつ経済的であり、比較的効果が現われやすい方法であると述べ、子どもの保育と将来の見通しについて具体的に述べている。つまり、暗黒の長屋から子ども達を明るく空気のよい部屋へ連れ出し、花が咲き、鳥がさえずる野原で遊ばせ、可能ならば、昼食を食べさせる。また、入浴させ、散髪して洗顔させ、笑顔で「鳩ポッポ」の歌でも唄わせてやりたい。そして、成長したら、車引きや日雇いになっても、どうか正直かつ真面目で勤勉な良民になって欲しい。良民に迷惑をかけ、監獄に収監されることがないように育ててやりたいという。さらに、長屋暮らしの劣悪な境遇を生きる子どもたちを良い境遇に招き入れ、遊びや食事、入浴、散髪、歌唱を体験させ、彼らのより良い育ちを期待している（二葉保育園編1985：432-433）。

以上のように、二葉幼稚園・二葉保育園の実践は、不良住宅という子どもにとって劣悪な養育環境から悪しき感化の影響を最小限に緩和するため、昼間だけでも子どもらを救済する視点と論理にもとづき保育事業を展開した。他方、志賀の場合は1日の数時間であれ、子ども達をより良い環境に連れ出す発想は同じであったが、町の外へ、太陽の輝く青草の上や水のほとりに連れ出すこと、園舎のなかの保育ではなく、あくまでも青空と土のある露天保育、さらには郊外保育がめざされた点が特長的であったと言える（写真8）。



写真8 緑と太陽の中で

出所) 北市民館記念誌編集委員会 (1983) 『61年を顧みて
—大阪市立北市民館—』 大阪市民生局 (北市民館)、
p.39より転載。

おわりに：大人の目線だけでなく、子どもの目線を忘れずに

最後になったが、雑草の魅力と都会の子ども達について述べた倉橋惣三の言葉を引用して本稿を閉じたい。なぜなら、筆者による3年間の研究は、大人の目線からの検討に偏重してきたことをあらためて自覚し、反省するからである。筆者もかつては1人の子どもではあったが、当時の感覚は時間の経過とともに忘却の彼方にある。倉橋の言葉は往時の感覚を多少なりとも想起させてくれるのではないと思われる。すなわち、「とにかくに子供は大喜びである。半ズボンの膝を没する雑草の間を駆け回って、きゃっきゃって言ってばったを追うている。みずひきの赤いのをしごいて来て、小さな紙きれに包んだり、あおぎりの実をむしって葉に盛ったり、おままごとの御馳走はいくらでもある。お庭でも、公園でも、幼稚園でも、草は見るもの、花は眺めるもの、その、見て眺めてしかして触るべからずときまっている草が、ここでは遠慮なくふんだんにむしってよいのである。草と一しょになって遊んでよいのである。当分は別に

玩具も何もいない。この雑草こそ、自由自在の玩具である。恩物である。可愛そうな都会の子供たちは、この雑草を特別の賜物のように喜んでいる。自分たちの生活に必然の世界としていくらか自然が与えていてくれる野も知らず、山も知らず、そこで遊んだ先祖たちの幸福も知らず、たまたまの夏やすみを利用して、自然が辛うじて与えてくれたこの雑草に、渴けるものが水を得たように喜んでいる。」（倉橋1926=1965：63）。

今後は、大人の目線のみならず、やはり子どもの目線をよりいっそう意識して、さらに研究を進展させたい。

文献

福元真由美（2019）「志賀志那人の北市民館保育組合における母親の協同」

同『都市に誕生した保育の系譜』世織書房、59-77.

二葉保育園編（1985）『二葉保育園85年史』同保育園.

川端直正（1951）『北市民館30年のあゆみ』大阪市立北市民館運営委員会.

北市民館記念誌編集委員会（1983）『61年を顧みて一大阪市立北市民館一』大阪市民生局（北市民館）.

倉橋惣三（1926=1965）「夏やすみ後」『倉橋惣三選集』フレーベル館、62-63.

中根真（2021）「自然と子どもの関係をめぐる研究活動報告」『2020年度里山学研究センター年次報告書』35.

中根真（2022a）「自然と子どもの出会い方は十人十色—自然と子どもの関係をめぐる研究活動報告その2—」『2021年度里山学研究センター年次報告書』44-47.

中根真（2022b）「保育者養成における『子ども理解』を問いなおす」『龍谷教職ジャーナル』第9号、33-48.

中根真（近刊）「保育者による子育て家庭の多様性理解—『幼児理解と教育相談』の前提を問う—」『龍谷教職ジャーナル』第10号、51-66.

大豆生田啓友（2022）「今、なぜ、自然にかかわるあそびが重要なのか？」

同編・著『子どもと自然』学研教育みらい、6-13.

志賀志那人（1925）「子供の国」『子供の世紀』第3巻第11号、4-14.

志賀志那人（1927）「凝視する小さな眼—子供の国（六）保育事項の—」『子供の世紀』第5巻第9号、6-11.

武田信子（2021）『やりすぎ教育』ポプラ新書.

謝辞

本稿は以下の研究助成による成果の一部である。記して御礼申し上げる。

- 2017～2021年度龍谷大学犯罪学研究センター「保育事業における非行予防の機能・役割に関する歴史的研究」新時代の犯罪学創生プロジェクト～犯罪をめぐる「知」の融合とその体系化～（「保育と非行予防」ユニット長）
- 2019～2022年度JSPS科研費JP19K13966「『幼児教育の貧困化』防止・脱却と就学前後の連続的な貧困予防に関する地域比較研究」（研究代表者）
- 2022～2023年度学校法人龍谷大学重点強化型研究推進事業・龍谷大学社会的孤立回復支援研究センター「子育て家庭ユニット」（研究代表者）